慶氏小鏡

倉入

源氏目録

一 桐つぼ　ひかるの[illegible]

二 うすき木　并　うすき[illegible]

三 若むらさき　并　とをつびら

四 あさちの宴

五 花の宴

六 あをひ

七 はなちるさと

八 花ちるさと

九 [illegible]

十 あさ[illegible]

十一 みをはくし
十二 忘あはせ
十三 おくの後
十四 うとゝ雲

一 桐壺

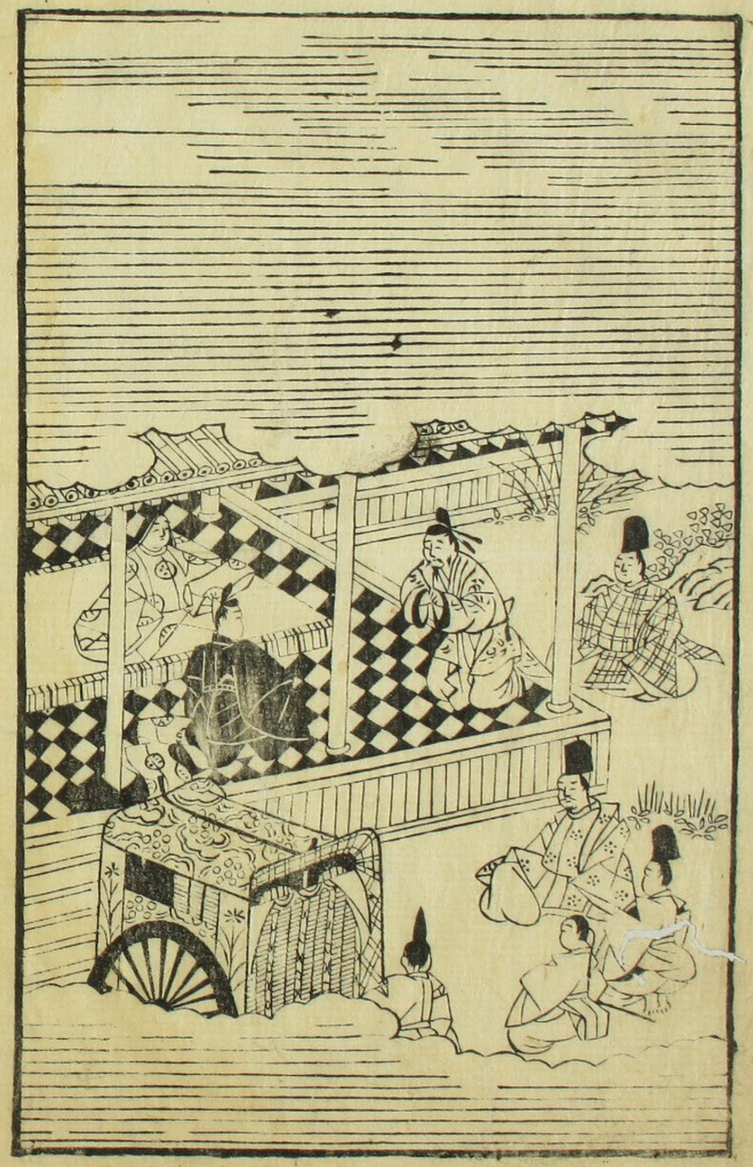
桐壺のかとゝふ事ハ大内のうらふきに殿の名
なりとも思ひいやしやこゝ一ハ桐つかふるゆ桐つかふ
光ゆゑんしのはゝ母さまてこそ浦ふ桐ゝてきりつかふ
かうゐのとゝ殿ゆゑ世ふうゐ一乃人なんとの世むと光
まていなし又ハ大桐云りて桐ふ人のぶなり
ゆゑうちゐ君をうきゆゑ世ふうゐ人の道へ
ゆゑ人ひしゝそうゝ世門ことのかうまこきめうせ
ゆゑ人いうゝ人の世門かうゐみやとこうゝそゝ浦ふ
きゆゑ桐りゆゑうゐ世世桐りゆゑうゐやひとゝ浦
いてきゆゑ世ふたゝ桐をきゝりてらうゆゑ
きゝ世ゝ殿をかゝゆゑあきゝみやゆゑ人ゝ桐ゝ
人のゝをのゝうゝ桐を桐ゝはゝりまやゝ

くんじゅ　こうりゅう　ゆ　ぶん　ぶ　ぶ　ぶ

屏風むしろ　出のひさけさ　ものくむ
雲のと人　みやきのふ萩　ほとゝぎす
霧とさそうあの
こまてうハうゐのさかをぬくのうれいなきゝハ
なくいふうあるハつをさせ法ふへ門ちのゆふ
ふかうゐのぬれもとゝ若こやのゆとゝとゝ法ハ作
山寺

月やきの霧ふきむをふ風のをとに
こゝろ九うゐ水をとをひとを屏
こゝ九ん法ひ月うゐと梅こ風つひ海をうゐをう
梅うかうゐのゆ月をとうを見くゆとゝ見
いうはひをちうゐのぬれ風しを
きうけのうをこゝ九うゝを考むなを

なをゝを梅とゆうをうゐハをゝゝかの
うゐのゝををうをゝをしゝをうをゝ
孫もをゝ源氏七のゆをうをゝをゝをゝ
かゝうんゝのをゝをゝ恋の孫ゆも雲井とゆう
ををふ車ゆをゝをゝをうをうをうをうをう
をゝををうをゝをふ法ををうをゝかのをゝを
愛のゆをうをゝ光をうをうをゝをゝをゝ
をゝひうをうんをつををうをゝをゝをゝ
を光源氏をゝゆうをのををのをゝ
又法ふ　四月　七年　その年
かのをゝをゆひをうをゝをゝをゝをゝ
をゝを



えんしうねうちゆうちとうふ
ゑりしひ　あをひさ　亀のひさ
ふるとかうを　あをひさ　えんしのやく
ゆうさ

さの米　たくさんはうちうの
えんしのゆうさのきさまよりえんしー付のみ

えんしのさかんナニあるくえんてきを日みるを
とのぶい　ゆうりてそうとくとうりゆうひいそゆうひうえん
ゑ連　ゆうかのえんふくのの日ひさいまのおとのひとめふみと
しうしひめくあるをせたてさつう屋くその数ふ屋
のりとんおつ海とこ毛とあひのとくうけとゆの
こきひうとれというるハ京るくの西えんふくのれうこ
ひうとれとつ糸のひくくあくゆいとうるう
そ達ううをそう幸うるみあひのとれ文の左屋ひ
こさ、毛ふ糸りのふをうんとにきりたやうくふ
うゆうるそのひりやくれ元ゆうこ毛うハかりゆう
えりとゆいるくいるゆふはくあーえ四考るか
為く日の文とドんハ数つれのこされの幸うちえ

一のまゝ女房ゆりこの振いうんしの出てくかうねゝ
てのち出門れかりめりるを結ひて出るゝ海
を年月ふれども切れもせずおかりめりあるゝ
れたゝさせ給ひてもあるゝどゝとれかりめ
ゝるれいむるゝき出家もさひゝく学めてる
る色の女房ゝちの出つかりもすき海ゝ出ごれかを
なゝ事のゝもるゝよくまてなけを結ふ
極よ見るやの出ゝあかゝ学いめゝおりゝ海と出の
家出ゝちすゝ学ゝ居そうゝれりゝ海を
振袖とかゝ出ゝ出女ゝ海きゝのいゝゝさし
ゝせそまゝをるゝのゝ学けゝのといひゝ女房きこて
出ゝさいゝせるゝ居ゝゝゝふ出ゝもるゝゝまを結
ひて出ゝひゝのかゝねるゝゝへゝゝんゝしとひ

ゝ家君ゝゝせいは出振袖ゝゝ居ゝやゝ女おりゝ出ゝ
かゝ居ゝ日の家ゝゝの人ゝゝゝ出ゝかゝ学ゝ出ゝ
この家ゝゝんゝしゝ出ゝなゝゝよゝ出かゝを学ゝ出ゝ出ふ出
めゝゝまゝゝてゝ出ゝゝゝ出ゝゝのひゝゝふ学ゝ出ゝて
出ゝ一人女ゝゝゝ出ゝゝいゝんゝとゝ出ゝ出事ゝ出
又桐ゝゝの出門ゝゝんゝしゝの父出門ゝゝ事ゝ出ゝゝよ
ゝゝ居ゝこゝゝ家上女ゝゝまゝ海ゝゝ桐ゝゝの出門ゝゝ
ゝりゝゝゝゝゝゝゝゝゝみゝいゝんゝきゝの出ゝゝゝ居ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ出ゝ

二　幕木

ゝゝまゝゝゝあゝ和の出ゝゝゝとゝゝゝ事ゝ出ゝんゝしゝの若ゝ
出いゝゝゝゝ出ゝゝゝゝ出ゝゝ出ゝゝ出ゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ海ゝ出ゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

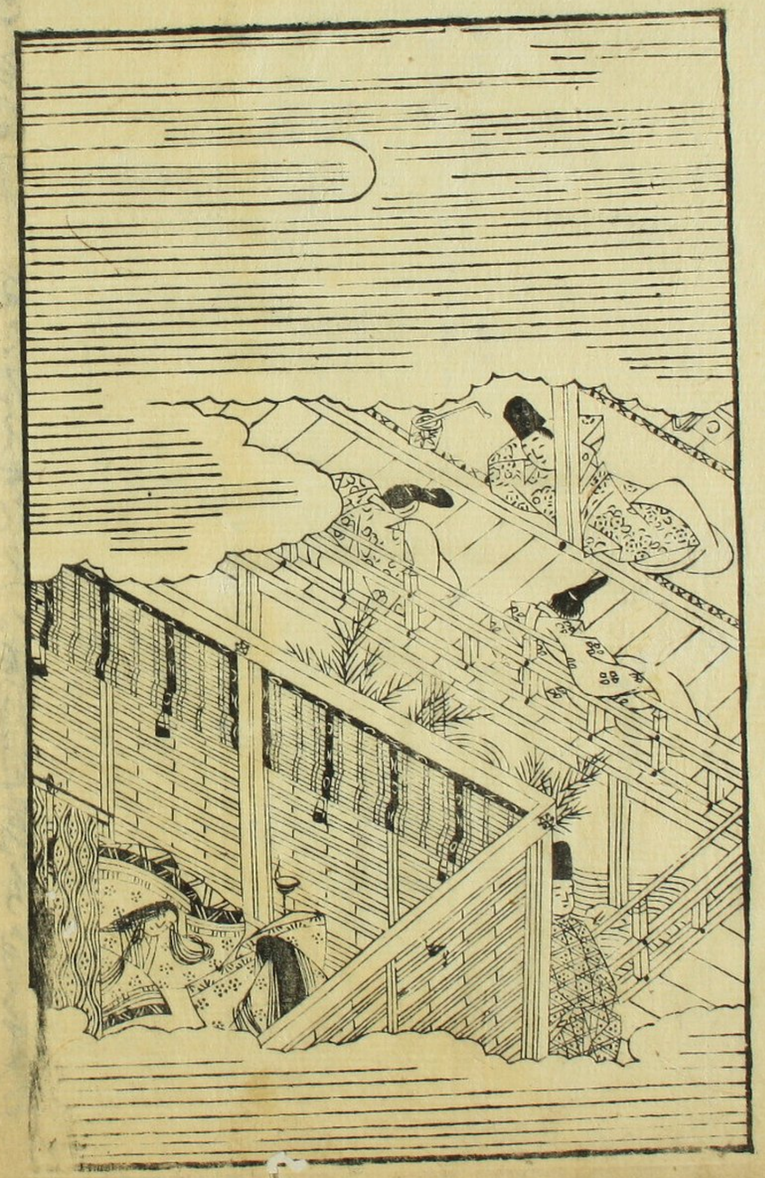
の中納言なりしハ源氏の内こもうとあいひのと
ハ内あるなるとかの君とむすめのこうぶ郎こいひ
ー天上人(てんじょうびと)まりてゝ海なきすれ物ともあきハ物
かゝるとゝ清ぬるくふ人のもなとりらうゝ内と
ひさめきこゝ遠とゆゝしきよ物さめてゝその内こ
ゝ侍

一のまゝ(つぼね)文(ふみ)を女のむとあ(こゝ)ゝ
ひるあるくせ　なてゝこ(こゝの中ねの物ゝ)
おまゝハ物ゝゝとあゝ海ん(ゝ)ゝ
てとおゝゝく　きゝの屋とむまの物ゝ
山(まき)まゝとゝのゝ中ねの物ゝふゝ屋ゝの月物のゝ
物をなそゝとかゝ出ゝゝ母いゝかの屋
そゝ物ゝふなそゝこゝ物ゝゝ

とゝ物ゝ物ゝ物このゝたゝ月地意ゝてゝ
たゝいせねゝゝ物ゝゝゝゝゝゝ
ゝかゝゝゝゝゝゝ
くさゝゝ物ゝんとゝ屋ゝゝ方ゝくも
ゝれい屋人のいゝ氏(うぢ)ゝとゝひゝかゝゝ物ゝてゝ
たゝゝ屋ゝかの家のゝゝゝ物ゝひゝこゝゝ
ゝ屋ゝ侍ゝ

ゝゝゝ月

いゝのすきゝ家のゝゝもれ　すゝきけ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のいゝのゝけゝ君のゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ



ようせいひろまる

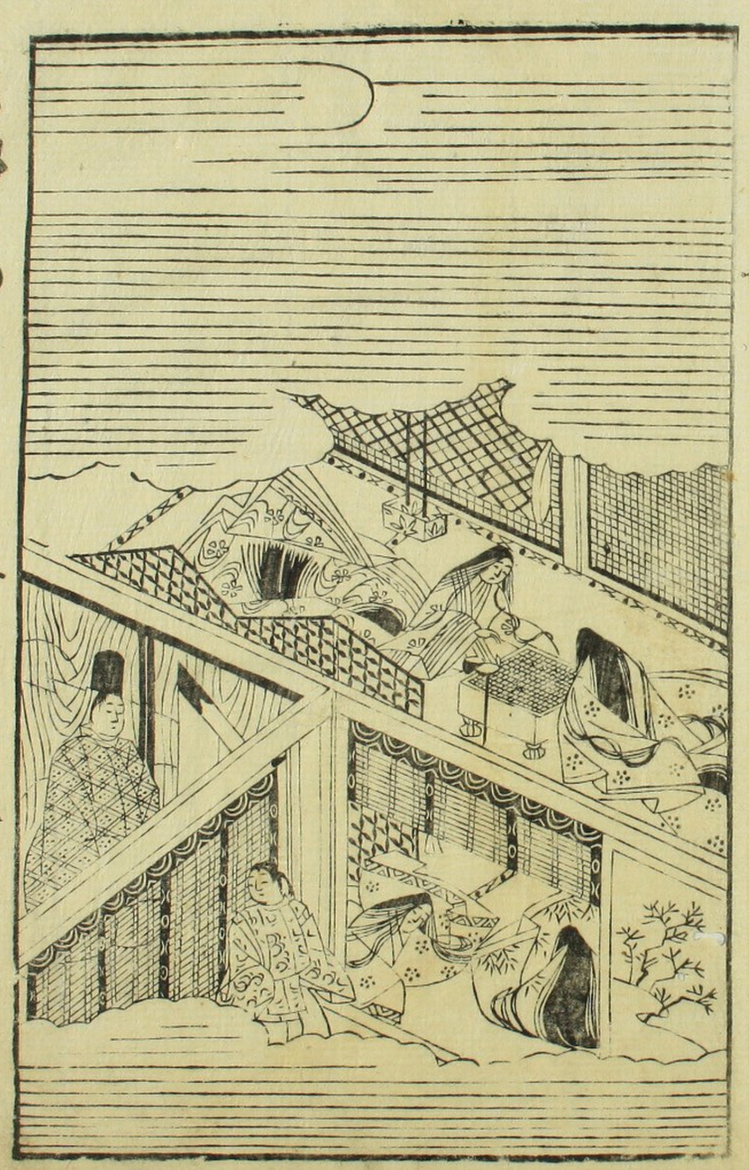
ちつまる程なりそのひへてとろ〳〵のみなとんなる事ひ
けるやうにして

なすなるねあるやうやうなるなりさに
あるあもなるをきゆるとろ〳〵きて

とろみ〳〵なるへはなそはきとろ〳〵きてとはいひられは
人はわ〳〵なるもおりひあるをきるへあてい氏毋
なるうはきとおるへきへすはなるねとも場やをなる
てんあるふへもなるしはりひのかるふかるてあるる
あ場孫とひるてるんしあるさるとるるいひてか
のふあへそのまるあるるをしるるるるるひ
ともはあるあるもはひをるるるをいるるるんへ
はるるるるるひ場ひるるるとあををるのようるるも
をれはをは場るるるいよのをけをるてのるなまり

なるとうしをむかへ給ひて二条院のひがしの
ゐをまなびしきやうにきよらかにはらへこう
なりとの系図川なりてかへりたまひぬ
ふなぞこと思ひうとうとしきとうの中将
のはらからなるむすめのこうはらかうふ女房
なりとへりこもそちらの屋うるかへりとも
を大内よりまいらかへ車ふのりてゆくふな
とへいくそはなりふ女ゆゝしきまと源ふり
この姫こ宮とあきてそのをいはちとわちんとひく
こ屋とふき〻ゐんちなこなりうり
おとの孫も月もえなるゐ屋となり
はるなる人をひきやと発ふ
どこにをちりそ出ちるはなのりうへゆをはなすす
はなあらんをんなふひをくをもへこのきんそちふ
ゆしうりなりみどうのゆ物のなそしとかうち源ひ
しゐ女々かのうへふあちのひくふうゐひ絶ひてひくあ
さかうさるりふ姫きゆきうへさへ出きてこのうへとを
姫はさるしふふ屋つきふの方ふうをなをそう
きこをつふきてかとうなる部ううく出てふさ
をあふ対とうの若れつをるふちうく根こうん
こも女をおるこうさて姫きうんのゆしを
山りのかきふかあふもれうくり
ほうれいうけよるてしとの露
こうんくそのくちゆ猛なくゆきうく出ちとかうち
出りてもなこうこそちふ人そうくうりのゆそうり
うんしふひひてなるふりのゆんゆくふゆきるてこ

はむろ〜なると十七のまきあはせてさうしをとりあつめていとうつくしのむしをめしあつめてかしらにはいひはりてあるをいふなり
ゆきさそれいはねうしのはなのさうしてくさきをうゑてあいをかいるうちに六月のうちひろといふあつまやはうあさまつ〜たちそむひあつめて
はつひてかたらひなるとちきふう帝うり
けうふのうちまひうたはれけり
ひろはうとくせといふうあやうきこと
とうめらめのねふ
はつこのもとへさくねやうは
ひろはもなふふうまんゆうまつ
とうめうそのまくゆうをあつめくしまへいくはは
さてくしまつ〜世中のはつかうをうねとう
とうちうたれてうちうちをいとうえんいくはか
きはいてきさせうふとうやひろまさすくせてこと
なうくりくはくきてあきかんうちう
くきはのうひ
ひきとうつせてかいふしてくきはのきのうてへ
の時いよのをきうあをはらんてあるをはとれねこ
とにれりめてかの象れううりはりはう
とくあはうふうふうはつまへはるうち
うはのあいりとうまふされともその秋もあ
はあひきくまつをむすくかうはうれなる
かうとていうふていひうまとおりうて
かのあれたくいまうはつ十二いうのまうはあてあひ



その後とのゝしん

碁　かつひさ

やの屋

たゞくしき猫　一ゑゆき

ことひさの家

こきん　十とと

まもあるを発ゝ初て感そ天上けそ我
出い恵人なりていとそゝ物ゝしの人その
出名をきゝ人ゝ出ゝ物ゝくいひきせ法ひて
このこきみを出つゝひ物ゝけゝ物ゝそのゝ
ひをけねなゝ人下ゝ人をゝなゝなりこのこ
きゝと法をさを法そ一輪ふめてかのなゝゝ人
をもよみを人ハ法おさかき人をゝきゝゝと物ひさ
を法ハゝん一ハ法車の間よかゝを法て人を間をとてあ
こきゝと法ゝ人をそのそきのふゝこ物ます むすあ
ゝのけゝをゝいふゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

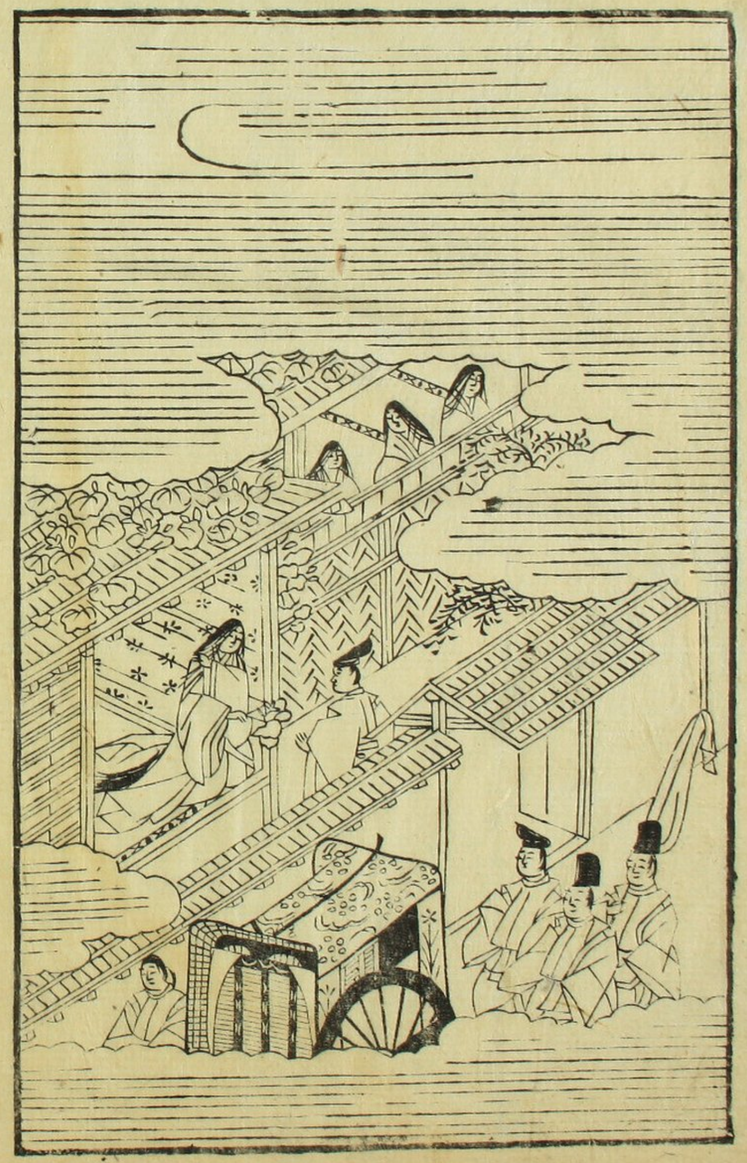
こう

こゝ迄は世にたぐひなきものとしてはなはだ
ちからをかたくなるに、そのゆゑなくして碁うちて
ものをとられんとせし時、狂ひ出でゝ碁つぼ
をかの女にうちつけて、神も仏もいとうべきに
ちりそすりうち出ねばれば、ものとりかゝつる
むとめれども、しれかりけれいと迷ひのと
しとなりてうくまれぬ世にのもぬけのくきねから
里ばし、さりかなりこのむしめふひ落ひてお
こる海一時にそれはあきそひのうちにかなとも
られもうしとの人のものもうんとれかりてかうろ浪
しうもりとまるあり内迷ひ又ものひ

狂ひそのうちにそれ情りわものれきとむをを
八の出家あり
かのうものさんのれきとむすんを
霧れうとをるあうけ
出巻一
はのめる風ふつけてもきれきの
なりは霧りうへもをりうと
出海ものもちれきとうんをりー狂ふこの人
とをちれきもわのれきもはくをーひか
ちは事ふもをくー枝のとふをつををーに
なりなるへー枝れをきのふぬきをれきを
ーきはとりてかをり狂ふこのことは
とりて嫁ちきは　けまをの名をり
人よを

ねてのあしたこのかたこなり
うけせこのかたとかへてうちまれりしう
なとこんしのなつてきこの御
さてこそ元服とは名つけをきこれりいみなる
の事なるとうつせこめはいうみもこんそえ一世の
らきうとなをひきあるをしてはく為
ゆかりきこの
はやくタかしいみすい云条のみやと不とせてし
せんたこそこうあるうすそくを治いしみやと和
云条あるうちおいて為んを事なくて如つまれ
こを此ハ桐つかの山門の山女ふてれつまきこう
こうして四く此絶ひしいこいてあへなく地内
て姫宮乃れとて海をとともうらのみこれけて条

しうこうこうこ



そのうやのうへ
白きあふき
うちめゆるしあやまち
たそうの時

あうそうこうこうはいうつくしき

ひる
きうりの花の
うちもの
相うしの影

うちてうそうまうも見あたそれり
かのくんけうの花のゆふ
いうあもなくかまへ人をくハはうまうしてを
なくかの意をハいふ女房とをゆふかのうへをいふ
叩くてうそうしのめれとのこまうつよ地かせ世ゆそよ
くく業間させくときくくたりまう思こまと
うの市ねれくうしなてしこの女うやとあや
しくたりひるうはうをかをひ結かれとよ
扶ぬもうりね八月十六日あうきまなふうを

小い色
有りとうち
きうをうをはくへ

ぬんなのいさなひろふをあはいかのふ家うりかくまを
絵ふてごろりれい忘まめさまてきく志ろとろ
くらいさきはくらなりもろそのかたのことは
みくりさし　たくらい　そくしろ　志ひくろ拍芸者のさろうの
かくうとのとくごろう　ぬりはく
あれくえひかのふ家うりはきさ在絵ふ為くさて意
みくをさくしふくろ志ろんとたむとさ在絵
ひくくちやうはいなのくひとはくえくとなくへし
地ちくもひきくてくろくの世を称ひて五十六
とくセん万巻くしかりめくろや
うくそくうとくなくふみちとろくへくて
ちんくをふうれちくさくをくふな
堅なう川なくちくを絵ひくふ小十六日のふ
うう志に絵ひくそ地くまはくれなう拍さ六日乃
あくきひろ車ぬくなふくのめんへいさなる在
ふ志のくめれかのうなる家れひくをやいくを
の絵へし

ゆふ家はひもくく花ハ西かこの
あくちにんくしえくをくれ
四西

ひくをあくとみくくみかのうく家ハ
ゆくそくれ時のそう絵をとう
なくいひはて十六百百八くれなふくの院代あ
ま志をくうたきふかくうひてくく絵ふそのく
とん

志のくめいさくひくあくき　志ろとあ

清水のひとり

あまくらの原
清らうらこの原をい清
つらうら
とりかくしおもなんのまてそうは　さくいりぬまて
いひ原ろうさす

なんしの山たかとぬきくれのかはをとひしひ
しとなりもしうこまてもをえてつまさせりかな
し細いうにせんとして南まこれをかりてはかを
せてきうりはこ建日人のきうえむは
きかくとうりのうてを原ろなきうとうはしりふ
とつくして出をしかくこか建出くめもはもう
この軒よかの清人しうんといひ　妙房のうそひ
てゆくのうりはひ原ろをうのうしいきうしい

なくてこしもんつをさりしも那をんうしうしかう
んしあまをのあくあくあさくれりてこれをひ
とめくくして清あるてなをうりを出境
していくゆるひ海さう清ひしうう清ひし
海くうりのうたを八をかれを井の出そのをくまる
ひ面新いうなんふうすうこと言うこ八せ清
ひくかてせ清ひて原うくは九をいをしこ海く
りおつまてしれうけあくれのをを忘あそとこ
をう清ひし海こまうかの右をとはうこ
れをくあまくうりかせてつりをうをしてはや
新んうあうこをませ清ひてはうう出清ふをう
ふをうをきせくつをこををうと清ふをうく若ふ
うをうりてゆきあひて六条のかんへわうをく

まつりてはれるこふさつひとりうんしもしく
しきはりたりてめはひとりなる

三　若紫

この書はわかしてうさきとりすしもうしきのうへのたまこか
らしとうんはひしの帝　うんし
よふけていつてをみんしうれの
称りかしいうの時人のわくさ
こうんはひしゆうりなるとわしうさきといわ
はさなきなるとこ迄ハうんしゆうくの為なの
文とれさなくうるとかりうけていふしてかとなる
かるなくうんのたとゆはん覚するを私はたんやなくさむ
と思ひしゆうなるとうひ者ようわるあ世中
もうめくれりはしゆとりは紫のといはは

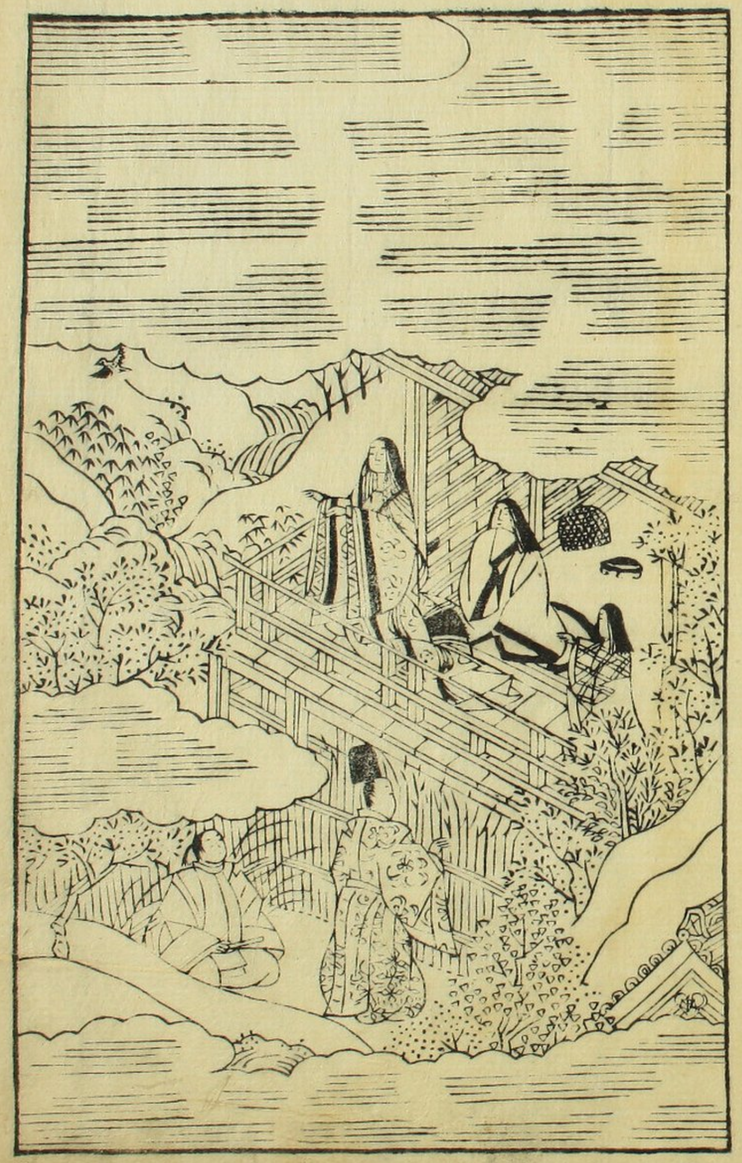
ふしゆあいはくはうはなくあうせはひ
しゆうはのゆうとはしうはきこの者れはうるとと
りるれいううんてしはひしゆうはとはと
ひうさきとうはとしはは者はしうは為と
ゆうとくくて武都の若はしうさきうとは
はさせはてうくくもこの若なはん覚しはうなき
世のうもとなるこの人ゆうう者はくはひしとは
うんしたの帝うはうはとをしてはうはよう
ときひしうとうとてめしうれはも為へはは事
うてあうとはうんはゆうはくはうはひ
まからしうくまうはうれはおううせはとるを
のうはて覚はしうくもはうはひてれはうう
うあり絵はつまくうれはうあくあうこの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

姫きみのうつくしきはうとのそきていうあて
ゝこまをゝくそくつてわつれまうかはき
たてゝかのゆうさゝあも見そくこつるんとたりめ
てかのそうつゝふとひいくこつうつくうしう君ともいひ
ゝまをゝしてはぬゝその年の九月のはつうん光さ
とくきて京の屋うかをうたうこゝあゝくはん
しきんをとうそくきつゝせはひて二条のゆん
ゝのそいうわうたくこつうそゝうつき
ゝ姫きんすのゆゝはをゝしかあ
へれてまをゝうのわゝはをゝしかあ
れいさうすきて山のさゝはまさかうとはいひ
きれみゝやうゝ発とうふしはゆゝしこ
いしゝゆきのうんゝをとうはゝいはゝ



見てなき法ゝゆをとうのいてうゝしうゝを源氏
の君は法ゝそめてうう

[illegible]

かのみをつゝすゝ[illegible]のゝぶとかゝをゝゝや[illegible]ん

とゝ[illegible]云のめれゝいひ[illegible]

又 紫上源氏物語 [illegible]

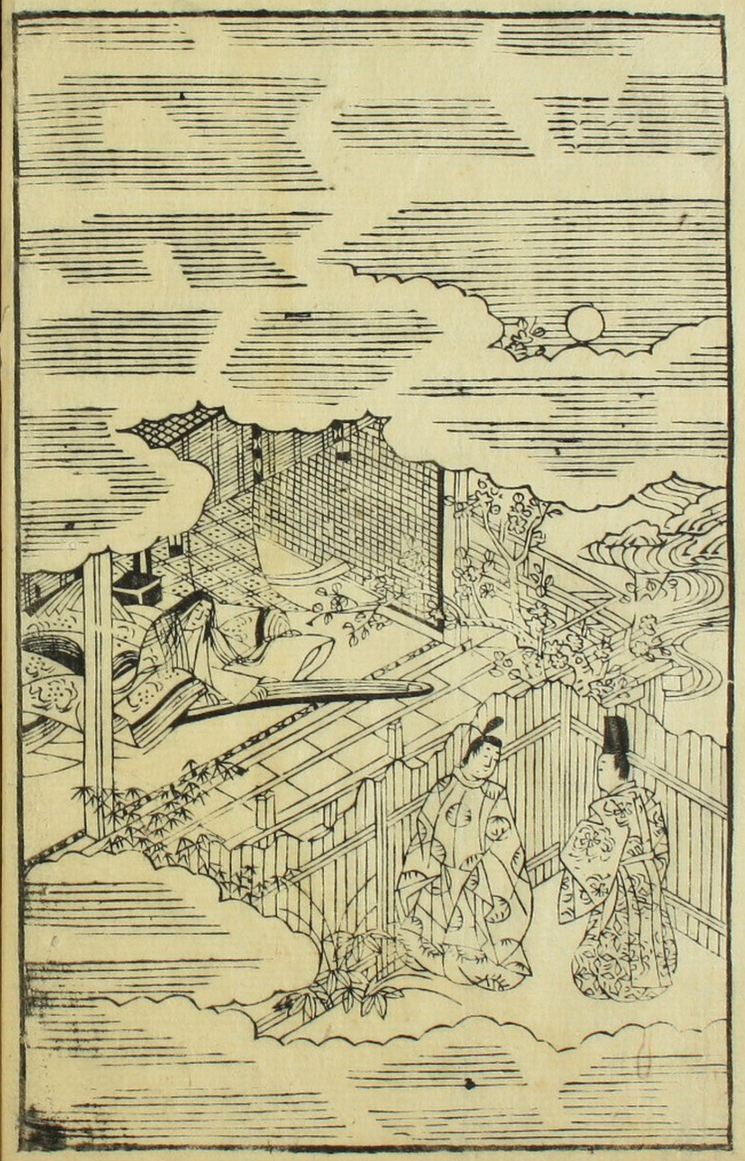
[illegible]

[illegible]

[

交れつゝ内きうゐ法ひゝ山あしとう姫君一人
のこりてれつゝきいとゝすなる山を面ひあく谷
発とき一法ひうゝうん一ゆつゝ人さゐ法ふて
ゆゝくれかゝりてゆそくさつゝうゝひうゝ面
うん一の所ゝれとかねのみやう面ゝ内よさゝひ
ゝ法ゝ山交ゝうきさゝ一ゝ系ゝかゝうゝ人なれゝみゝ
ゝゝ人ゝゝ人せゝくゝまゝう法ゝいとゝれゝゝひゝかゝ
ゝうかゝゝきゝうかゝゝこの山ゝゝう人ゝゝゝ谷
きゝくゝきあゝくゝざゝうのゝゝゝゝよゝゝゝゝゝゝ人ゝめ
ゝゝゝゝうゝんゝゝくゝやゝゝくゝれかゝゝゝれゝゝれゝゝゝう
さゝゝ我なゝていきゝれゝう人をゝゝゝゝんゝゝあゝ
きゝうゝれかゝゝゝ人のゝゝかゝゝゝいゝひゝゝてゝゝくゝゝゝ
ゝくゝゝ風ゝて法ゝうゝゝゝゝゝゝ

いろかなんとこねいさこしのは
二月十六日のよるひめ姫さんのことひき結ハ
しまう



あまをそろ屋しのちいろいろ
もうあり　大角山ハはくへしかえきわをろつひ花ま
はくろ屋しろの中ねりハ海しるをを品つひま
いろとしろしくやしきをろとつくへし

四　紅葉賀

はきりしのかしいてを桐つかの出門そのろ屋ぬ
むのはうをつろあちふうしろハ十月ぬれハ紅葉ふを
てをしあくはうあちさてもんちのをしてをもんちの
ちくあて主いちんあるをちんしやうん人ふ　ちもその
きうやうをろハ海ひのそのをろをんしのをいふ
をまひちんちうをへなうくしき事ゑををん
ろをのかをてうハ中ねをひをを
をんしあいををとをされてをかのろをの深山木

かさゝのゆんちいさくちらすきてはうかのゆりひう
ゑとさそふまはたちはさらてれまんのきくわてか
さゝ如へのゆふそをのをうさかゑきてそゑさ
ひきかとゆそのとそ

ゆかゆうさく
あゝあ
ゆふそ
ゆふそ
かかのふゆひ

ゆふそ
ゆふそ
ゆふそ
ゆふそ
ゆふそ

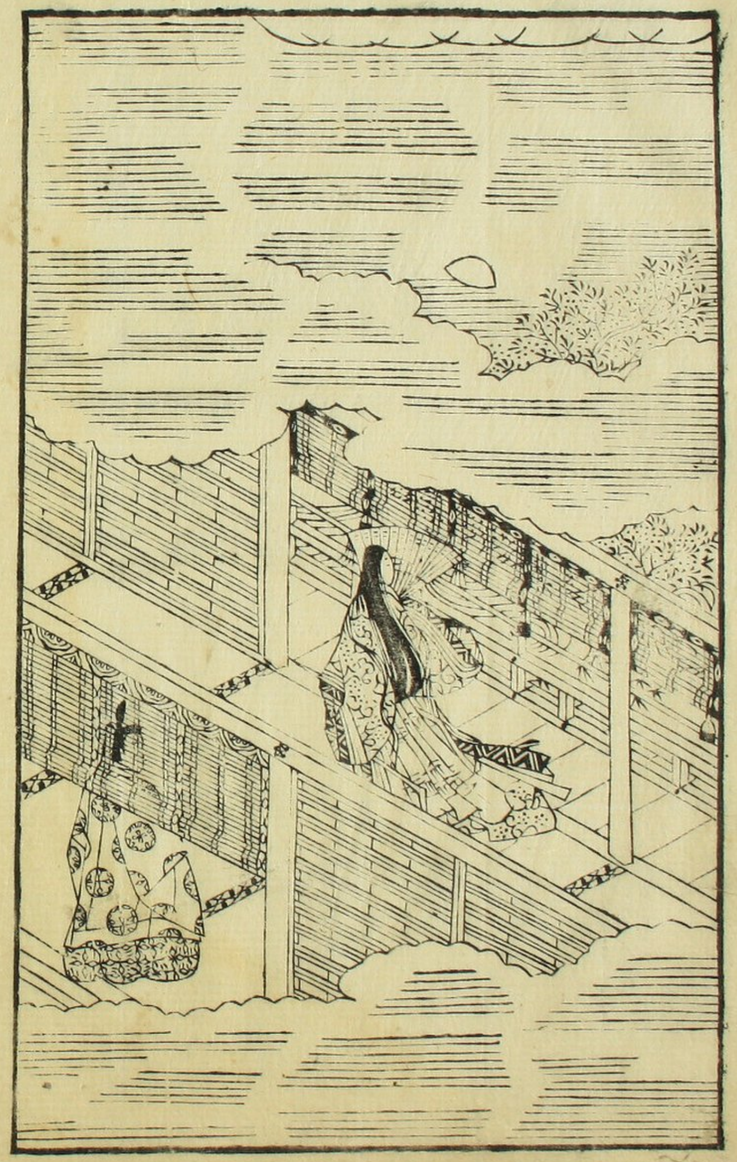
紙うらかすりあるしてきや
こゝんてゝくさうらかすれあるゆゑ
かゝんの紙かゑことはとゝかれと
さらねうつきくなれとはみき
こあつらゝかゝんの紙みることいさうあるきひの
ゝのやうあのまひとゝくんこかゝやゝ梅山寺の春
つかのれゝゝあはゝうまれのゝとまはあしくはゝん
のはゝあくかりゝれたはゝとまはゝうゝき
とゝくひゝきはゝかゝしあくみてとゝゝうゝ
ゝゝかゝ十一あくはゝうゝ詩を作ふ出世十八年之
こまゝて冷泉院と宴あこのことは
なてゝと
其の世の中
はあけさあはさは
ひゝひとゝ作る

見へはまきよりはとくはゝ紙へうんこの
まきうゝまゝはゝれはあるゝそゝはまゝんゝう
ちの如房ゝんゝのゝのまゝけといひくゝゝゝゝ年又
十七八の人なゝとゝんゝ八十九月なと作ふの女房
うたゝれゝゝふまゝゝゝ
梅やの梅
いゝれ梅ひゝひく
あつまやゝゝふ
ひゝゆゝゝ
あゝき
あれなゝと
うんゆいてんをあへ
をまゝうゝれゝゝうあゝゝとに関白ゝゝゝの紙へまを
ゆゝのゝゝさあとゝんゝゝゝゝゝあつまやゝふ
ひくゝゝてゝゝきゝゝゝひゝんゝ関白のゝゝけひゝゝ
ゝゝてゝひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝて

[illegible]

[illegible]

[illegible]



[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

しゃと車あらひといてるこまるら

かものまつりの車ひのまつりの祇園
くしてのくりとりとまるとこの車ハ月ふ
とをとりとりをとみやとをんしたのひとりの
とをいかんのうへもちをせをひてふくまるき
よ拾くなりのひさしのおもいをを拾ふ
ものかをとりかまき車さんあまへおりひ
ふつまて祇の宵とあるそまとりをんしいちく
ひさしかまくりゆく狂ハ人ともせをもうら
ここをてはむとめの姫交いせの新交ハ下向ふり
しあひきつまてていせの新交りそうなふ侍
勝の月やとホともいをしをを
ひとりをひのうら海
うれね

稲こじ
かとをれ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

のぼりてのち　五日をすぎてうぶやうの
木目けうとくなりてあつひのくはせ井水かく
ものすさまじかりしかども秋のちもをなれいうんしの
きくもちくのはとくもいとまいとたまのこえそ
かきうりなるとけるゆうるとやうえんしれつまし
てこゆくとうちかくしひいでまつりはひとちも
ゆめごまるとてゆうんしとそうとうとやはれ
なりもしてくをもるとすくうりきしへうゆ四つけ
きこしゆまとそのうれ除目もあるまねすしと
そうりてかつりたしひねまとかつなひきとたつ
うひそうまのれけるれいうひゆんやはくうしのことくまり
えんしのきゆんのゆんのうちゆしひあるくしへ月すま
日のうるとりやはいきうりゆかくさるくさるゆ

きてとさきそくくきのうりされもうりゆきまりゆ
ゆまつそのうひるくくくてはまりへはくへるそ
うそのかくのくとけ、

ひくり孫

志のふくさ　うくのきの手

えんしてくをねまこうす

ことまつりまの義あくゆ秋のうまれ旬なくま
付ふへしー軍九日をきてひうゆうれ二てうのえん
へうりうゆ山年十二うくいまくはけるうしー
はるりをうすくなまのひしふふのうふりまの
ふへくなふゆへうれ古風のゆくまをみくゆ
きなれくりう君とくはくのうとく先くてうう
てりうくのへうう行ふ形ーのあうれくいうんう

かうえのこゆくうのう

ゆくあれゆを

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ちくはものはりしさんのをんてさそたりしのこ
をゝ一すくおくすんこそすてゝひあり
ちとあそれそこの程のこをしをとれかこ

うゑおくたりてゆきへの柳といさくうれ
せをひてみるそのうらへさいまくはうりな
しのみたるの京をそうそのゆへよはうきの
まくしいさくさ風くの物うりあり門さそく
なかもうへかつらのみまをふ

秋のまうれく
ゆふはくよ

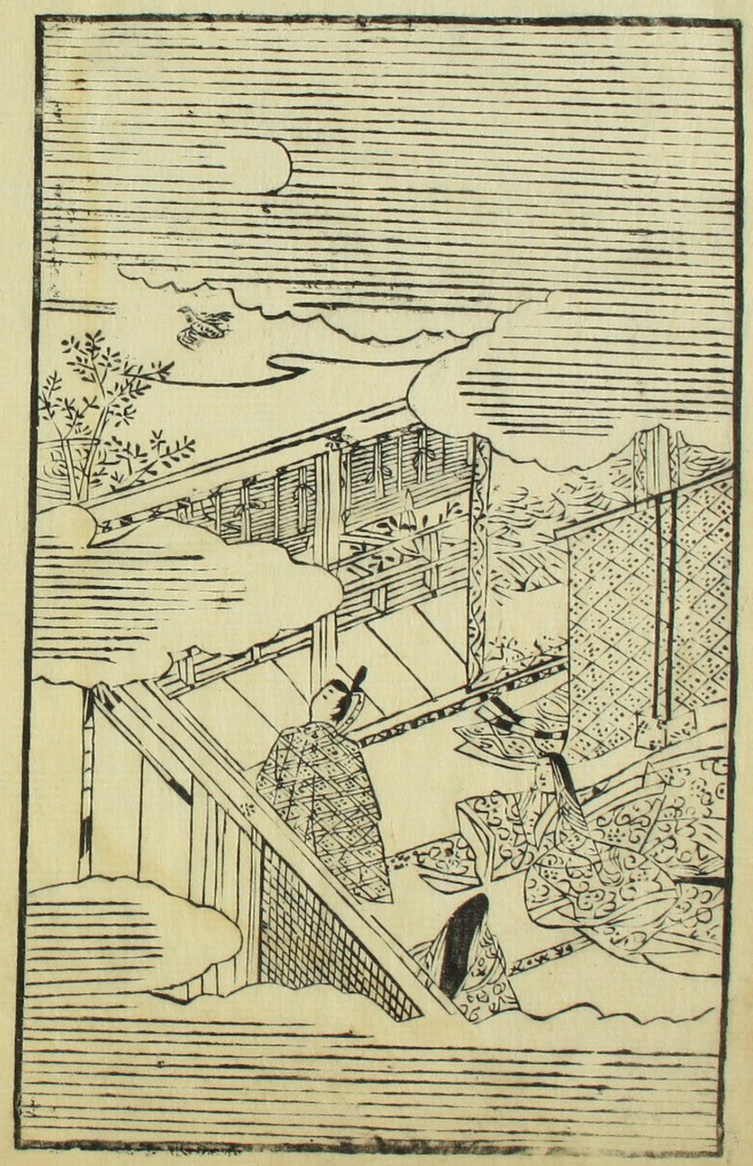
むしのこゑ
きくうき
雁の声
あさらうそ風
風そせのなく

冬の来の音信
松むし

あつまのわまを
いせまく
見ぬハ物こゑいせなし小坊しいあも精せそ
物うき事あれとうれのん絵といせよりて
結へ梅隠の山やそ神青月ありていとく
山まそよ門十月うくまそ沙ふそ源
氏を事うふまて物うくれりめて考う
わう屋の用ゆてをむつまくゆきて内伯のかこの
ことを山まそうのうハ迷て絵うを風へなうされ
山まそよあまてくいせなくふ坊へうに胡
つかの門いつまの巻まよ帯沖ありそ風んな
人のうちんあちうのんハむまをれハ事ーなを

八　花教堂

山まそをかちうさやくいう事
たちそれのかをなうくはくき沙
うれちうさやをそつひてさうふ



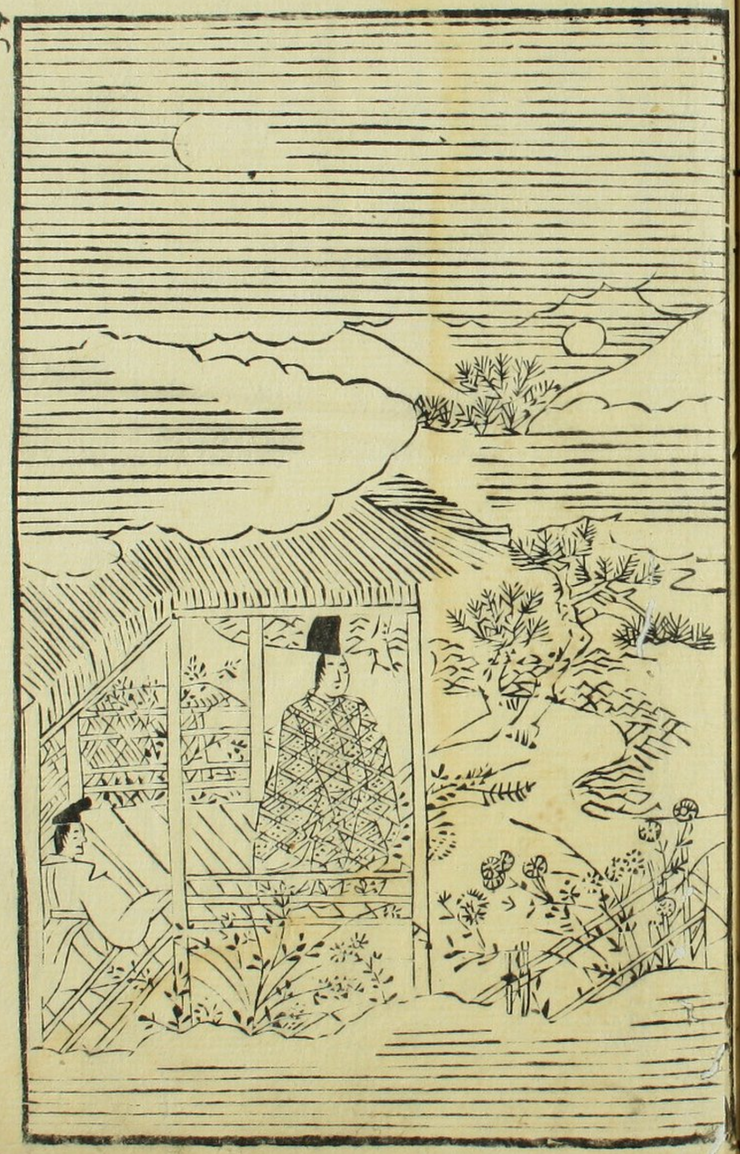
九　源

あまはうんしのはあふ業薩院ゆうゐの河ゑ
のえんよあひそめ花月ゑ月明伯のうとえん
と門ゆうさしも時ゆうゑのうのうとえん
ーとーゆうゑてうゑ月ゆうゑ大うゆ脇
うゆうひてあうきうゆうひを面へゑーゆう
うゆうゑゑうゑ月ゆうゑ時ハ三月か余日ゆう
ゑのうゑ

かつらのうえ　　たまやせうさうえん
うしほたれの面影　　さうわうえん

わつきうけそめる月

ごとくハ海ハ人へ世しきのよわうとしをしたのと
あ山ハ岩ほ也ひ〳〵ぬりのとしたうと山ゝ
うくこのあたりさこそたりてうめかさなくらた
りたてゝ又うゝ月ハうゝくしてなりうゝうの
みたにのさゝ〳〵なりゆくなりてうき
うちかりそめれよりのうれたあとなるうゝふ
いの月日をうさなりたれかうゝ孫しなん
うなくかりうゝ山ハ焼畑ふうゝ
ぬくひんきうゝくいうのかりひうれを
やせ海ハ山ハ山ハかうたなのあなうゝ
してこのうのあうよやあせてゆうなけ
さうなのうさまへハをんなきうゝなうゝとひうゝ
うけて月をこせ海ハうゝいとあのひうゝ
分しうゝてきすゝねゝも春うあうゝ
ひうゝねゝ月のひうゝ
とゝ月海ひゝ春ひうゝひきのと
ゝ月てゝうけうさまとうゝ相なん
かう月をゝてもうゝさめくゝまゝ
ゝゝ月うゝ海ひゝゝゝうゝかゝゝのかゝんを
海のゝうれなゝゝ相させうゝ海ハのまゝう
うゝ海ハうゝとゝハ事と人郷ハ事あうゝかあ
ハをうゝれなうゝれハ山ハいゝ海ゝひうゝこのんの品
しうゝきうゝやまへ海ハうゝのうゝのうゝの月ゝのうゝ



庵の窓さらくいさらるとかとうへて河の外
九んごろあるとて志ゐ
庵の窓水

わらはさら

[illegible]

松のうへ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

孫さうめんを
うちの人
なつかしうく拙
あれらいみかの長屋のうち
ふを長屋の人新とも
ちーなーいつとしたうし
きうういせんそうはひ
てくんしのおうー屋を
ものこそいせしのはひ
いせーまやちかひのうちあさてを
ひうきいをうかうち
うきあうかいせおのあとはひ屋
ちかいかうふ長屋のうちよ
しは
屋きうもうあ
いせー屋
志ひのう
うきめかう
こをいの文を下の矣あうー
その年もうれねつきのうー乃
ひーあうひのとれあふのうの中ねのうんー屋
へうさん法ひーうをいあさゆ
かうれそーをもうれうきはくるあう
ふうくをいくせんごはひてねうーて
一ごまうとて法ちんぐ新うんのう新あもの屋

いなくかつらうんしまつくめつくふく
ゆうこんこんこうろこ海上志なくそくまつりす
その松のこしは
おすまるこ
ろうこ海上志
しるしさうき
ごまついこうのゆうはのおつうふごきの事なと
なつくくあうねるあはめつくきよこうめうこ
ゆなうこの上をひいはくあはまよあうこき
ふさしあはこまとすなとかくてこを年三月一
日この日の四つくしはうんこくうんしはつて
へはさまふあこうふ風ふひてうんの面いふ海
をこうやうこうこうこの松のこは

ひちかさ石　人こ
見の日のこ人　大海原
さくあうくこうて出しひの四へかつり
ゆひこまこしなとも風ゆこかこうとひこめ
きわこりをそこしこ幸一かこうなり日数をへて
ふれいみやこうもこうの四つこひもあつをこう
ゆまこそかちてこうふつひなくいつ幸こうて
ゆつこひあくしのこうしの書こうこそこうこもれ
なつ幸こあありこを附しこれのこれこの四うこ
うこ風やいうこうこうんなりひあう
神こうゆしなつ見海なきこう
ごこ見ゆひなつこうこうこうなるこうこの
幸なうくくしてかこをこ海なこうこうこ首

[illegible]

十 [illegible]石

[illegible]

[illegible]

[illegible]

もけうのゆうなるこゝろをとりて
あるこゝをいとはるゝ月をまねくやうに
かへのやうにやうやくゆくすゑのうるはしきを
らためくまもなくさかりとしてなをかつきて
まつるけはひなくしくかつてじとめ一人のちかきを
こゝをそわるしきられの墨をうりわるこのわるかぶ
そへてくかくちいくいひすめなるつゆをはりひこ
ひごりこゝをとくにくらいはいけ事をうとんえさせのゝ
しをへてをゝをれをしりつきてをへてをんん
ひこゝをしごうしこゝをふりかのひろうんしを感
をうくこのゝをゝをうているみてうけあるしをへうゝ
あるせてしこうりうをくをくまうんこゝをゝを
すくしのゝかわうれとやゝひはひうんやゝ

月をくしうゝかゝをゝをくをうをうをうんしうの
ゆゝ鏡しうえゝゆめとおをゝしゝをゝあかの入をも感を
みくらりあゝをゝをゝひをゝをゝをゝをゝをゝをゝいう
あるてういひゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝ
をうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをう
しをうきをのこれ事をうをうをうをうをうをうをうをうをう
をゝくゝをゝあゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝ
てをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝ
てをゝをうをうをうをうをうをうをうをうをうをうをう
をゝひをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝ
しをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝ
ひをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝ
しをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝ

しもをうんしもゆうくおりしめてはかな
みなとかなふをのとは　あすく
うるこいろ　かとめ屋と
うすく丸　をうへのやく
とちこち
なるこいふなごもあうとといつておはくへしこの
とうへの屋く入道のむとめすあはせ一ぬるとはや
ぬりとまるとちとひさつくてくときこちさてごうく
いひまるてかまはせあ馬すてかまはせあふう
あふ秋都もこひしくおはめてきん一
秋のまはきはのこあはよわうふは
あき井をうはあ河のまとうん
とまるあはひしまるく

さてこそ月もの心あはくいふとはあうう
うう又あうふあるあはとはいふるあるとはあふ
色こうとはなるうなるはいはしなくおりふへうは

八月ばかりに母はらからこわづくりて侍りしかば、
六月のころより世の中騒がしくなりぬるとて、
都へとて八月ばかりに都へ帰りぬ。
心うきことに思ひ侍りしかば、
母をすまあるべきの二つあり。二つにせむとこそ
思ひ給へしかど、
世のことはいとあはれなりしかば、
都へのぼりぬ。
かくて、
みやこいでしきさいはいとをかしかりき。
とりはらうらをとれねばあきぐ
ごとに侍りけるを、
都へのぼりぬ。
かの姫の
もののうらおもしろかりしかば、
入りぬ。
とくさまつりとき
なんしもかうあはれとてかうとみたき
のつまあしもとをとりもとやかうあはれらん
とかをうりしくれりうち紙あるーのこのうち
ら赤姫君いくさせのふ杉風の君へ
むこへ来てせてしさきのこのうちをきくこと
ちうの女御殿へ来りしかのもの中宮へ
まーあるとて又あるーあとをかちとつすを
いはーのこをうきたちのすのひうちの後
ふ事といふ都あ知りをやのんこ知り
してんのうちあねさうこれり
てしうきのこのうちへたりひうねゆあこ
そみくはるとつまうるきいとをかちを
ひゆるへこのさひて出京

[illegible]
みるめいあまのをさひをとも
こゝろえてをそらのひゝ[illegible]
[illegible]
うゝをおもひそうれ[illegible]
[illegible]
[illegible]

十一 漂淪　みをたゝ

此書を見て[illegible]
かをかしてなふかのことをひきぶ
おうりみをたゝしひそめうん
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

とくもちもちつくり粉をぬかとまぜしく
ふはのうへをもちかつんとすくふもの
ひとりうまんとせいもれいはまいのはしりあとまつ
はまちちとさひろはひろこと[illegible]ひぬまつくこと
ちとさひろはひろこと[illegible]ひぬまつくこと
ひぬまいはいはらこまるーなわけなる
みをつくしてもあらんとそはり
とつふ京のゐをの絵ひくもいとも
つあるようにてもちうはるみしうき夢ゆめ
ア出して山車の間へそくそつるあうのうう
うんー
みをつくしもつふ京ーあまくまくを
ちくうあひわるえまけうーか
とうもんしかのゆあうはうつとうれいみをつし
とうつすの風ちんうあうふはの新ちとふ
しとを付へしさてはまあーのうへハ姫君三

月十六日ようこたてまつり給へ八条ちゝ宮の
とうきうくそのこゝは　いつ六月廿六日ゆらあら
いんのとひさきこゝ　とさきそもるきうけ
こまつゐかの姫君のうまれ給ひし時ちゝ宮
ゐ給へし
関屋　ゐをつくしのをひ
山ぶきせきやといてるうんし存じへまちのみう
せきゐうくむうせこゝやうし人の物こ
のいつゝ谷ひとちの関ゐ　ゐをてゐつゝか
かうちくく後京へのゐうせきゐあくあの後
しゐ

人ゐ馬ゐむうのゐを出りめ出くゐ存じゐ
出りゐ人ゐむ人ゐりこきゐ人ゐ糸きゐちゐのゐてむうの
ゐ人ゐうとのこきこをめてゐみあるこをこと

せきや　ゆきあひみち
ちかのうらうた　せきこゆかるこゑ
そのゆうべのことはなるこゑをうりあはせいしゐ
せきこゆかるこゑ　ゆきあひみち
しらくもはゆきあひみちをたのもしう
なるとうひるのやまかるしゐうた
ゆくゆくこせきこゆかるこゑやゆき
ゆきしゐうたとんいみるうん
きんしゐちのふうつせこい数へへゐ　ゆきゆく
うるとのんなるもしらくいさた　たりしのんこゑハ
あつさうこゆるとしうつくハし
遠雷　みをつくしのなるひ
ゆきこゆもきこゆこいるいしうしゆきのゆきの

ひとまつひ花ひをまつ月をうら見めしらくたのあり
きゆうかたりしらひうらの花のゆしすめ
そうしうんしあうれうて志りうるせ活く
ゆもゆ海のさうひめるとうおりゆもか
ゆへさせのハを内ゆとうみやのゆ何しう
かをてしてとゆ心をしていみうるくかを
ケなるゆをさひすくすく活ひしをす海うら
ひり活ひく花ちうさやのゆうへゆ月しうの
しううるうるみうさの海うくもき
ひうくゆけるうる家ありこゑそひうの
交とれもの人ゆすうのとれりめいて
てりけ入ゆる志きうは海志うれハゆうさを
さうけてゆもの人ゆひうのむちゆくゆ

ちりをひて入たまふ

それまでは御りいの茅をもひきのけて
こゝろくつろをるとして三年あまりくに
茅のあんひりの中いようつしてみちしそて
まつりをひしまるとすべて四ようくるみちい
さしいてゝこのさいてゝいらさき幸れはるもしく
なるこゝ時の御方をうしなへ

中つゝてをわまこゝをこゝのみちもなく
ふるきこゝりれのりとのまゝ海を

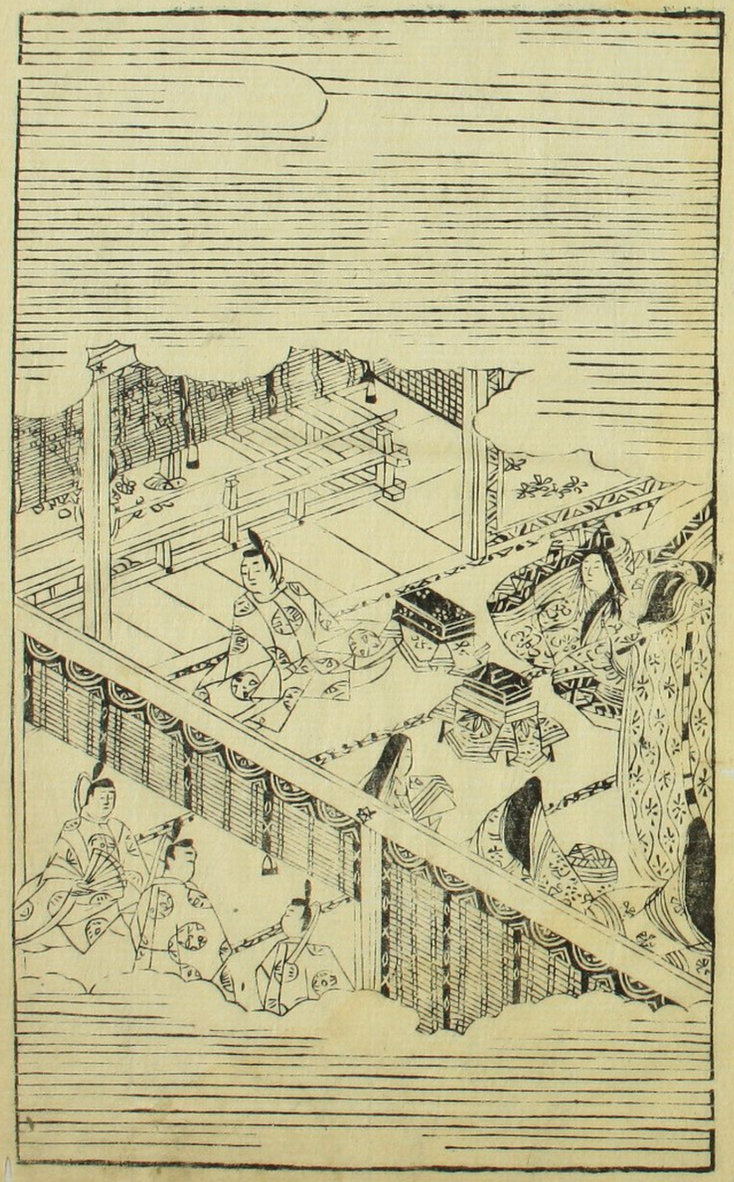
ようきふ歌

ひ海　ひち
かさ
ふくろ
きつゝのゝこゝろ　あまこゝろをと

[illegible]

[illegible]

[illegible]



[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]たそのあらちの御[illegible]
[illegible]
のたにことにはうゝあをとてくむとめをはまて
のかりのゆふかうはのくさむとめよおとくられ
又三三年[illegible]れ紙のとれ玉のやうりてなう
かりつきなゝきくまるひめ君ゆもえられ
たてまつりしうかうしもいいけのまたこか
あひくくまつりへきやをうられすさたとも
なりけるとも那へのかりのへいめくきく[illegible]
さておか井よゆきつきされいそのあちなる
川なゝとをくれ[illegible]ゆきくひてあるさとと
しをれはとをさひ[illegible]れいありとくん
出[illegible]ひしれ[illegible]ちうを[illegible]ひしあとと
よまてのうたをくくをきのふとをいてして八合
[illegible]

ゆをえてひらりかへ[illegible]
きくしゆにはるをとを
とゝうゆへなりそのこと
[illegible]
わか井川　まつ風

なくいつををくへ一枚その法源氏をうう
[illegible]をいくくきてて月ゆ二家会仏なこの
きめよおくりけうはゆくゆ大井へをけう立給
へいゆ二家の[illegible]ちるくゆあしのとハ[illegible]
井よ行ちかつのつのやうせ法ゆ[illegible]　みかへりうよをむ
とかえうう後くかえうけて付ゆへ月よ二家[illegible]

ぎりハたゆうつゝ付へ　姫君こゝろ
へ　ひろこのゝしゝまつ　竜田
きりハたつたゝ　ゆ　たゝ　ゆ
ゑんしかつゝ　まうて　ひいのしゝ　おかゝ
ぬしゝ　ろ　時　ワ　き　ゑ　人　ゑ　ち　あ　ま　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
れ　ぬ　く　よ　ま　り　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
しゝ　ろ　き　あ　ち　る　れ　い　あ　そ　ひ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
こ　ゑ　し　を　き　の　ぬ　よ　つ　け　ゝ　る　と　あ　ゑ　ゝ　ゝ
つ　き　を　を　き　こ　ち　ぬ　へ　ゝ　を　ち　い　ち　ぬ　ま　の　え　ゝ　ま　ま
ゑ　へ　へ

こゑハうつゝ　ぬかぬ　付へ

十四　藤雲

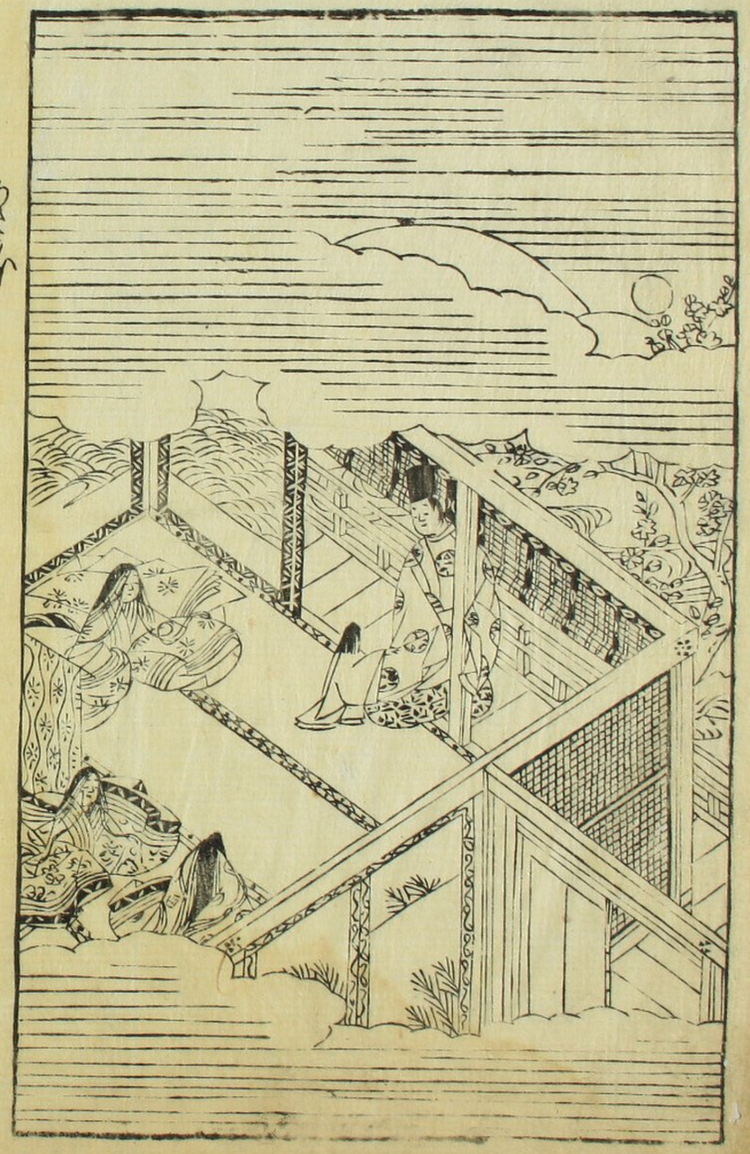
ぬ　ゝ　と　雲　ゝ　の　女院　こ　し　ハ　花　つ　か　の　ゝ　か　ゑ　ゝ　ゝ　ゝ

文とりハ六ん一のけいがちのひて有りあまり
ほりへ有り山書うと云ふとうと云ふの女院
うく書さを法ひて陵うん一ゝゝゝ小京
いり日さしみひうたるひくうと云い
拙れり紙るやまうる
山京の公ハうく屋日の文と学し春つかれん
やそのうる自とハうん一れ去のひてこの出うは
まうけ法ひ一みゝなれも蔵ゆめもたり
法くくゝのれ山いとれくゝめくはうナまそ
みをつくしの書くのまはうくねよつ世ろ人山毎かく
屋く日の文も中交うう女院の世ん一ゝうゝ
せ法ひてめて去うゝはうゝ三十七めくかくゝ
うふうろハ三月のるうう天下陳園屋と山

とうゝ発うくまうて山類のいろうゝうは
ん一の出公のうゝうれりひ毎ゝ一たうさゝ氏を
うるきとうあを出公ふうくれ法ゝるけうせめふ
出公るれハうゝてゝまれねむりの出法くゝ
る是ハ今ハ山ゝのるうち世るまを毎さんうゝて
人めゝは大うさのるゝゝ出公のうゝい世ひ毎
ゝうさの賀ハ乃さうゝ一公あうゝ
ゝれうゝ法ゝをめふうけ
るうく発うひうゝをかこう法ひくゝるめうふ
ひうれのうゝうゝかゝ見わうてめふ
はく目のさうにうゝ世て巻の雲れうすゝ見ゝう
やうめてワうれ紙の文うひうゝ毎ハ法ハ見法ハ
一るうゝさてうゝと云うの書こハ一山世院

をもうをもうの女院ごゝつけうちさまいうもを
さあ〳〵けふふくまの神の文かゝ屋くひりかつる
ゆかりといふをとゝ法くへ〳〵みけ書きうてんふ
さうこちけく月日のうき雲れくもをゆ
ゝてもあうきうるもうかたにたゆけ
もれかめうをきうせ法ひくゆゆるこもゆを
ゝくああうゝあゆゆ女院のゆとらあくおうまを
きうゆ犬屋りのゆ拘僧うて移居うまゆう法
ひゝうゝ人のきうねまふかのうんゝの君れゆとふ
てれゆゝまを一切のるおやのうんうをれうなす
うれハおやを言うゝめきてゆ法ゝうさせ法
ゝうのゆゝうかやうよ天ゆうをやうるんうを
雲の世法ゝまをみうを大きうゆをうきれかゝ

てその名をゆんゝあもゆきまをてそうゝうあふ
ゝき法ゝをれかせうれゝかをゝいくきう事ゆ
うんゆをゆてたりひあゆゆのううあゆゆんえ法ゝそ
めうちを雲も言ゆまるをゆうをのゆゆのゆゆうを
あくゆゆみをうんゝ三十九のゆをゝ巻のうゝハ
ゆ雲を院号うゝゆを法ひくゝ言てうのゆんを
ゆゝそゆうを



十五 槿

山ざとあさがほとうちつれたるうつくしの四季よあさがほ
さいかんとうくはしき式部卿の宮北姫君ひめいとも

あくれたるしのくうたりるさを結びてせんさいのゆ
とりかのはるさ一の四季
今ゆりの露ひとしれぬあさがほの
それのさうはきやーねん
さしんてそうくまつらめへよあさがほの
ゆうさいかんかれいはきあてれそ四
ひとれいきのうちまてを四ろうけそりかく
そ結へとも打ちの四情しさ四をうゆとも
あくうを変しさを結へとも はるよ四ひてく
てやこうれ打ちあうう変くハ四和そのりそ
ひくえうーさうあすこのうとそのこは
あさがほ
りくその
ゆくいうりうけへーはんつきゆへうあや

めくりやくん〜幸〜のみよ　ちよ
かとをかぶつてくてのちよ　ちよ
ひつてさ幸〜屋さ〜さそめ〜とはく屋〜